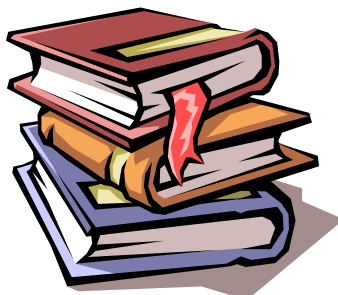


世 界中にキリスト教徒は約 16 億人いると言われているが、イスラーム教徒も約 13 億人いると推定されている。イスラーム教は 7 世紀に預言者マホメット <ムハンマド> (571? - 632・本書 p28 参照) がアラビア半島で創始したので、砂漠の宗教という一般的なイメージをもたれているが実際は異なっている。信仰する人々の生活する地域は、アラビア半島に限らず西アジア、アラビア語を話す北アフリカを中心とするアフリカ大陸、東南アジア、旧ソ連、中国、バルカン半島に及んでいる。また、この地域の歴史的背景を考えると、文化的基層にはオリエント文明、ギリシア文化の明るく知性的な精神的遺産、グノーシス主義、ゾロアスター教の光と闇の二元論、大乘仏教(本書 p2「仏陀」の項参照)など複雑多様であり、近代においては Kommunismus との関係も重要となっている。



イスラーム思想を考える上で、最も重要なことはイスラーム教の構造を理解することであろう。マホメットの時代のアラビア半島では部族抗争が相次ぎ、ユダヤ教、キリスト教、偶像崇拜などの宗教事情は混乱していた。彼は偶像崇拜ではないユダヤ教徒、キリスト教徒と論争をしつつ、神の啓示を受け、それにより究極の一神教が創造されたのである。そのため、旧約聖書(本書 p22「モーセ」の項参照)を聖典とするユダヤ教、旧約聖書と新約聖書(本書 p24「イエス」の項参照)を聖典とするキリスト教については、敵対するのではなく「啓典の民」として尊重している。

イスラームとは“絶対帰依すること”を意味し、『コーラン』は神の言葉だけをそのままアラビア語で記録した書物で唯一の聖典と位置づけられている。そこには神との契約が律法という形で示されている。イスラーム教には原則的には『コーラン』以外に典拠となるものはないが、細部に互る取り決めはイスラーム法学者が作りあげる。つまり、人間の言動はすべてイスラーム法のなかに判断が存在し、その判断は該当する明文(法源)から直接、間接に導かれ法判断を行なうのが法学の仕事となるのである。イスラームには 4 種の重要な法源がある。第一は言うまでもなく

『コーラン』で神と人間の契約である。第二はスナ(慣行)で、マホメットの行為・言葉が伝承され『コーラン』で解決できない判断を導く。第三はイジュマ(合意)で、新たな事態に対する法判断が必要な場合、枢要な法学者の一致があればよいとされる。第四はキヤース(類推)で、明文がなく判断に困る場合、法学者の論理的な推論による判断である。このようにイスラーム教では法律は神が創ったもので、永遠不変と考え、法律を発見するのが法学者ということになる。そして、『コーラン』を中心とする聖典解釈学原理が組織的、意識的に適用され、公私にわたる全ての人間生活の領域を覆い、宗教が日常生活とは別次元の事柄としない「聖俗一致」となるのである。これは「神のものは神へ、カエサルのもはカエサルへ」というキリスト教の精神世界と世俗国家とを明確に区別する聖俗二元論とは大きく異なった世界観である。

イスラーム世界では、『コーラン』を頂点とする法体系に忠実な生活を送り、多民族規模のウンマ(イスラーム共同体)を作りあげている。そのなかで考え方が異なる二つの派があり、互いにイスラーム世界の範囲にあるとしている。一つはアラブ世界を中心とする多数派を形成しているスンニー派で現

世を肯定し、現世がそのまま神の国と考える。もう一方は、イランが中心の少数派シーア派で現世を存在の聖なる次元と俗の次元の葛藤の場と考え、思弁的な思考に特徴がある。

このようなイスラーム世界において、9世紀前後からイスラーム教徒が広げた版図のなかで知的ルネサンスが開花し、アリストテレス(本書p20参照)の著作や注釈書、プラトン(本書p16及びp18参照)の対話編などギリシア哲学やユークリッドの「幾何学原論」、医学書などの自然科学の文献がアラビア語に多数翻訳され、ルネサンス期のヨーロッパへ伝播されていったのである。

イブン・スィナー<ラテン語名はアヴィセンナ>(980-1037)は、中央アジアで生まれ、イランで活躍した思想家である。論理学、自然学、数学、形而上学などを含む『治癒の書』や理論と臨床的知見とを集大成した『医学典範』が代表作である。アリストテレスの著作を踏まえつつ、イスラーム哲学の基本的スタイルを確立した。彼の哲学者としての貢献は、世界の第一原因である神の存在証明と神の超越性を確保した上での世界の被造性を哲学的に調和させたことである。こうした世界や人間の存在を考察する態度は、多数派イスラームのスニー派と対立する思弁神学(カラム)の伝統へと繋がったが、一部エリート層に留まり民衆には広まらなかった。

イブン・ルシュド<ラテン語名はアヴェロエス>(1126-1198)は、スペインのコルドバに生まれ、法学者として教育を受けた後、宮廷医になった。最大の業績は『政治学』を除くアリストテレスの著作に関する注解であり、この注解書はヘブライ語、ラテン語に翻訳されキリスト教哲学に多大な影響を与えた。また、宗教・神学・哲学の調和を説明し、哲学の探究はイスラームでは合法であるというより義務であるとの論を展開した。

14世紀の北アフリカ生まれのイブン・ハルドゥーン(1332-1406)は、『歴史序説』において、歴史をつぎつぎに起こる出来事のときれときれの連鎖であるというアラブ独自の歴史観ではなく、一つの因果律的に連続する時間の流れとして捉えた。また、文明を類型論的に異なる社会空間に応じた生活の型として把握した。彼によると、文明とは人間社会にとって不可欠な社会的結合原理を意味しており、都市、農村、遊牧社会など人間が社会生活を営む空間には、固有の文明がある。そして、人類普遍の文明として、田舎文明と都会文明を指摘し、王朝の変遷をこの二つの文明の循環交代によって説明する。この思想は同時代の歴史家や17世紀のオスマンの歴史家に影響を与えるとともに、19世紀にはヨーロッパの学者により再発見され、高く評価された。

こうした独創的な思想家がいるイスラーム思想の理解と研究は、日本において十分とはいえない。それはイスラームに関する情報や知識の多くが、欧米や中国経由であることと、その受容過程でイスラームについての文化的先入観である「オリエンタリズム」も併せて受け入れているとの指摘がある。

しかし、近年では日本人研究者が、イスラーム世界に行き現地体験と原資料に当たることを踏まえて研究を進めており、研究対象も宗教、哲学、歴史以外にも政治思想、社会生活など多岐に広がっている。

今後、新しい研究成果に基づいた一層深化したイスラーム思想の研究が期待されている。

参考文献

イスラーム文化(岩波文庫)
井筒俊彦著
岩波書店 1991年刊

世界がわかる宗教社会学入門
橋爪大三郎著
筑摩書房 2001年刊

岩波イスラーム事典
大塚和夫、山内昌之編
岩波書店 2002年刊